

面(図4)では、細胞膜は厚くなり、各細胞は毛が着生する植物体の表面に平行に扁平されて長くなったものが多くなり、形もやや不規則となって、各細胞の確認は困難になる。さらに本体の上方では、その横断面は毛が着生する植物体表面に平行な線状となり(図6)、その輪郭は不規則な波状を呈しており、毛の大きさにもよるが、厚いところで約 6.5μ ある。この横断面では各細胞の確認はできなかった。本体先端部(図7)では各細胞は遊離する傾向があり、細胞の横断面は円形である。本体においては単一細胞の膜はある長さの間は鏡下で焦点を動かし観察できるが、ついには確認が困難となり、不明となる。さらに本体の縦軸に直角またはそれに近い位置をとる細胞模は、本体下部を除いて、全くみとめられなかった。

おわりに

上記の観察から明らかなように、ヤマツツジの茎と葉にある多細胞普通毛は、その基盤と本体下部を除いて、着生する植物体表面に平行に扁平された毛であるといえる。さらに毛を構成する各細胞も、基盤と本体下部のものを除いて、多くは扁平されており、毛の縦軸に直角またはそれに近い細胞模がみとめられなかったことから、細胞は縦に細長くなり、両端は鋭くとがっているものと考えられる。このようなヤマツツジの毛はコバノミツバツツジ(*Rh. reticulatum* D. Don)の多細胞普通毛(筆者1983)に似ている。

肉眼またはルーペでの観察では、毛は分岐していないと思われても、顕微鏡下では分岐しているとしなければならないことが多い。また鏡下で毛の本体から突出した部分が認められる場合、これを分岐したと表現するか、しないかの判断基準は数字的に明瞭にされていない。したがって毛の形を取りあつかう際に、分岐とするか否かで困惑することがかなりある。そこで本報では、さしあたり次の基準をもうけて分岐の述語をもちいたのである。本体から突出した部分の頂点a(図8, a)より突出部分の縦の中軸線を引き、次に突出部の上側基底b(図8, b)からこの中軸線に垂線を下し、この交点をcとする。もし突出部分の中央線acがbcの2倍より

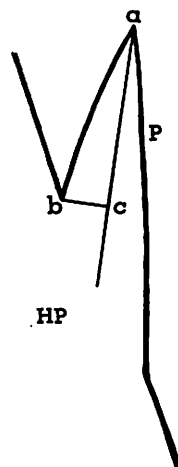


図8. 毛の分岐基準を説明する要図。HP, 毛の本体。P, 本体からの突出部。

大である時は、その突出部を分岐したと表現し、2倍またはそれ以下の時は分岐したと表現しないことにしたのである。すでに述べたように、ヤマツツジの多細胞普通毛では、小形のものを除き、微視的には分岐していないものは認められなかった。

引用文献

- Hedegaard, J. 1978. Morphological studies in the genus *Rhododendron*, dealing with seeds, fruits and seedling and their associated hairs in Contributions toward a classification of *Rhododendron*, The New York Botanical Garden, New York.
- 1980. Morphological studies in the genus *Rhododendron* I and II. G. E. C Gads Publ. House, Denmark.
- 栗田正秀 1983. コバノミツバツツジの毛。採と飼 45(8): 346-347.
- Kurita, M. 1984. Some notes on the *Rhododendron* plants from Japan XVIII. J. Phyto-geog. and Taxon. 32(1): 52-54.
- Seithe, A. 1978. *Rhododendron* hairs and taxonomy in Contributions toward a classification of *Rhododendron*. The New York Botanical Garden, New York.

〔植物ニュース〕76. シラカンバ *Betula platyphylla* Sukatchev var. *japonica* (Miq.) Hara
シダレヤナギやシダレザクラのように枝が細くて長くのびる性質のものは枝垂れになり易く、盛岡市のシダレカツラも見事である。

松本市の勤労者福祉センター駐車場北東隅にある数本のシラカンバのうち中央の1本は全枝が見事な枝垂れとなっている。シラカンバの枝垂れは杉本検査誌にも出ていない。これは植えたものではあるがどこかで自然に生じたものと思われる。(奥原弘人)